

## 現代社会の日本について

笛吹市立石和中学校二年 石川 真依子

今年二〇二一年は、東京オリンピック・パラリンピックが行われる。そして、パラリンピックでは体に障がいを持った人たちが競技を行うのだ。そこに関連をつけて、人権について考えていこうと思う。

体に障がいを持つ人に、偏見を持っている人は多いのではないかと思う。「あの人は障がいを持っているからかわいそう。」こんな気持ちの人が多いと思うし、正直私自身も同じような考えでいた。

ある日、インスタグラムの投稿で「アメリカでは障がい者は神様から試練を受けた特別な人たちという考えが多い」というものを見た。私はどこの国でもかわいそうという考えが多いと思っていたので、この投稿にとっても興味を持ちインターネットでくわしく調べてみることにした。すると、意外にも障がい者に対するアメリカの考えが出てきた。

私が最初に見た情報は「なぜアメリカでは障がい者を弱者と呼ばないのか」というものだった。これを書いた人は長年アメリカに住んでいるらしく、アメリカと日本では障がいに関する考えが大きく違うらしい。そもそも障がい者とは言わず障がいと共に生きる人、という言い方をするそうだ。子供の場合は障がい児とは言わず、特別なニーズのある子供と呼ぶそうだ。アメリカでは「人」に焦点を当て人間として同じ権利があることを強調していることがわかる。そして「インクルージョン・クラスルーム」という全ての子供が同じ学校に通う制度がある。障がいのある全ての子供が皆と同じように学ぶことができる環境を提供することは、公立学校の義務であると法律で定められているのだ。教育だけではなく、交通機関や公共機関へのアクセス、雇用や住居の機会均等が法律で守られている。アメリカの同じように接するところが素晴らしいと思った。

次に見た情報は、生活の中での水まわりについてだ。それは、同じ空間で意識させないこと。日本国内では、車いすマークが表示されている多目的トイレ、多機能トイレなどの設置が増加しており、一般のトイレと別の場所にあるため障がい者等が利用しやすくなったと声があがる。しかし、入り口が別のため健常者と分けられていると感じ、障がい者であることを再認識させてしまうことがあるそうだ。

これに対し海外のトイレの造り方は「同じ空間」ということ。一般のトイレには入り口に車いすマークも表示されており、中には幅の広いトイレが一つ以上あり、手すりも設置されている。これにより、誰もが同じ入り口、空間で利用でき、互いに意識をせずに譲り合いながら利用することができるそうだ。そしてもう一つ注目すべきところは、洗面台だ。並んだ洗面台のうち一つは膝入れのスペースがあり、車いすのままでも利用できるのだ。鏡の位置にも配慮しており、デザインを壊さずに誰もが使いやすい環境を整えている。

そして最後に、パラリンピックについて考えていこうと思う。パラリンピックは、障がいを持っている人たちが競技をする大会だということをみんな知っていると思う。知っているからこそ、見ない人が多いのではないか。見ることによって、障がい者への気持ちも変わってくるかもしれない。私は少しパラリンピックを見たのだが、誰もができる簡単なスポーツではないのに障がいを持ちながら一生懸命行う姿を見て、とてもカッコいいと感じた。パラリンピックを見ることによって、考えが少しでも変わる人がいるかもしれない。

私がいつも何気に見ているインスタグラムで、考えが変わるような投稿を見たことがとても良かったと思う。なぜなら、日本以外の国では、「障がい者」はどのように考えられているかがわかったからだ。もちろん、海外でも全員が平等に、同じ人間として扱っているとは限らない。しかし、そういう考えを持っている人が少しでもいるということが嬉しかったし、素晴らしいと思った。これからいろいろな生活を通して、日本や世界がもっと障がい者が快適に過ごせる世の中になってほしい。